

## シリア反体制派「アサド政権崩壊」 首都制圧と主張

シリアの反体制派が首都ダマスカスを制圧してアサド政権が崩壊したというニュースが入ってきた。12月8日、反体制派はシリア国营放送を通して声明を出した。

Xにも「ダマスカスは暴君アサドから解放されたと宣言する」と投稿された。ロイター通信はアサド大統領は飛行機でシリアから脱出したと報じている。行き先は不明だが、2011年内戦が始まった時、劣勢だったアサド大統領はエクアドルに亡命するという説が流れた。当時の関係性が残っていれば行き先はエクアドルかもしれない。



8日、シリア首都ダマスカスで反体制派の到着を歓迎する市民ら=AP

シリアで内戦が始まった時、反政府軍の勢いは強く、親子2代にわたって続いてきた独裁政権は崩壊すると予想された。

ところが、アサド大統領の外交力は予想以上に強く、イランとロシアの援軍を得ることに成功した。反体制派は北部に押し込められ、長年アサド政権軍の空爆や化学兵器による攻撃に耐えてきた。

何故、突然反体制派が一気に首都ダマスカスを制圧できたのか。

背景には**イスラエルの暴走**がある。

イスラエルはパレスチナのハマスに対して民間人を巻き添えにした攻撃を続けているが、ハマスの背後にいるレバノンのヒズボラの存在をずっと警戒していた。ヒズボラはハマスとは比較にならないくらいの軍事力を保持していて、背後にはイスラエルの天敵と言えるイランがいる。

国際社会、特に国連がまともに動けない状況を利用してイスラエルはレバノンのヒズボラに対して攻撃を始めてしまった。

# 13年の時を経て初めて祖国へ帰るチャンスが巡って来た

イスラエルがパレスチナのガザだけに止まらず、レバノンのヒズボラにも攻撃を仕掛けたことによってヒズボラが弱体化した。

ヒズボラはアサド政権に対して軍事支援を続けていたが、ヒズボラ自体が攻撃対象になったことで、シリアに対する支援が難しい状態となった。

そのタイミングを狙ったかのように反体制派が一気に攻勢をかけ、首都ダマスカスまで制圧したようだ。

まだ速報段階なので、どの程度の制圧状況なのかは分からないが、アサド大統領が脱出したというニュースと、シリアのジャラリ首相は同日「人々に選ばれた指導者と協力する用意がある」と声明を出していることを考えるとかなりのレベルで首都ダマスカスが制圧されたと考えることができる。

残されたアサド政権軍が反体制派と徹底抗戦するかというと、アサド大統領が逃げ出した状況での徹底抗戦は考えにくい。

そして、反体制派の軍も残されたアサド政権軍を壊滅させるような攻撃はしないと思われる。それは主義主張があってアサド政権軍として戦っていたわけではなく、多くの兵士がアサド大統領の肅正を恐れ、仕方なく戦っていたからだ。

内戦がほぼ終結して、アサド政権がシリアを治めていた。戦禍が収まり平和になった状況で650万人ものシリア難民がシリアに帰らない、帰ることができない状況を日本人は理解できないだろうし、詳しく解説するニュースも存在しない。

アサド政権は親子2代にわたって独裁政権を続け、逆らうものは殺害し、苛烈なる拷問を続けてきた。僕の友人も背中には鞭の傷が生々しい残っている。

戦闘が終わってもアサド大統領が存在する限りシリアには帰れない人たちが長年難民生活を続けてきた。そのアサド大統領が飛行機でシリアから逃げた。

と、すると。

## 世界中に避難している650万人ものシリア難民が13年の時を経て初めて祖国へ帰るチャンスが巡って来たと言える。

僕の友人は「生きている間にシリアの土を踏むことは不可能だよ」と言っていた。祖国へ帰る可能性がないと判断した友人はオーストラリアで国籍を取得し、もう1人の友人はスウェーデンでの永住権を取得している。

彼らは既に第3国で安定した生活を送っているが、本当に安全が確保されれば祖国シリアへ帰ることも考えるだろう。シリアの友人たちは生まれ故郷をこよなく愛しているから。

もしかしたら、長いジャーナリスト生活の中で、彼らが祖国へ帰る、そんな笑顔のシーンを取材できるかもしれない。そして、そうなって欲しいと願う。(久保田弘信)

## 反体制派は高速で進軍

